

【資料紹介】

田中稔 『大東文化学院の思い出』

浅沼薰奈

解題

本稿で紹介する『大東文化学院の思い出』を執筆した田中稔氏は、大東文化学院本科19期生であり、在学期間は1942（昭和17）年4月から1944（昭和19）年9月である。つまり、最も戦禍が激しい時期に学院生活を送り、さらには半年間の繰り上げ卒業を強いられた卒業生の一人であった。日本大学第二中学校を卒業後に大東文化学院本科へ進学、本科卒業後は高等科への進学を希望していたが、繰り上げ卒業とともに徵兵され陸軍に入営、広島県にあった八本松の兵舎で終戦を迎えたという。戦後は神戸市内の高校で国語科教師となり、教壇に長く立った。定年退職後には予備校などで大学受験生に主として漢文指導を行った。

さて、『大東文化学院の思い出』（著者である田中氏は『思い出の記』としているが、解題中では以下、『思い出』と略することとする）と題してまとめられたこの自筆原稿を、田中氏より大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）が受領したのは、2007（平成19）年のことであった。在学中のいくつかの思い出をまとめたこの短編集は、田中氏が80歳前後の頃に執筆したものであるが、大東文化学院に入学した当時の学生が目にした日常をごく個人的で率直な印象によって綴っており、当時の学生たちの生の声そのものであると同時に、学生生活や教員・先輩への思いを具体的に知る上でも興味深い内容となっている。

本解題においては、本文中で綴られる当時の様子について説明を兼ね、補足をしておくこととする。（以下、敬称略）。

田中稔が旧制中学在学中に出会った恩師として、本文では最初に森戸馨の

名前が挙がる。田中が初めて「大東文化学院」の校名を知るきっかけを与えた人物である。

森戸馨は、1916（大正5）年2月5日に東京に生まれた。東京府立第八中学校から大東文化学院本科へ進学し、高等科へと進んだ。本科10期生、高等科13期生である。幼少期より頭脳明晰にして性格は非常に穏やかでおとなしく運動はあまり好まなかったようだが、旧制中学時代には剣道部に所属し熱心に武道に取り込み、大東文化学院本科進学後は漢学の研鑽に励んだ。本科卒業とともに進んだ高等科では3年間途切れることなく特待生となり、さらには精勤賞も受けている。在学中は学院生たちをとりまとめる代表としての役割となる「掌事」もつとめており、かなりの秀才が集まった当時の学院のなかでも学問の才は群を抜いていたという。在学当時から「東海」と号するようになった。

大東文化学院において計6年間を学んだ森戸は、高等科を卒業後に1939（昭和14）年6月より日本大学第二中学校へ漢文科教員として赴任した。だが、翌年に勃発した「支那事変」によって同年9月に応召となり、陸軍の水戸市東部第37部隊に入隊することとなった。1941（昭和16）年8月に山西省曲沃の野戦病院において25歳で夭折したことにもない、甲種幹部候補生上等兵から陸軍伍長に昇級、勲八等白色桐葉章が下賜された。第37部隊において合同葬がなされた後、家族によって1942（昭和17）年7月に多磨霊園に埋葬された。家族や友人たちがその死を悼み『留魂録』を刊行したのは、1943（昭和18）年9月のことであった。同書を読むと、大東文化学院在学時より非常な漢学の才に恵まれるとともに、日本大学第二中学校勤務時代の教え子たちを含め、その生涯を通じて家族や恩師、友人など周囲の人々に愛され続けた人物であったことが伺われる。

『留魂録』は、森戸の父親が出版費用のほとんどを担って刊行されたもので、「森戸東海」が詠んだ漢詩を活字にして世に残すことが主目的であったと思われる。「序」には平沼騏一郎および鶴澤總明から送られた揮毫のほか、陸軍大将の南次郎、陸軍中将の中島今朝吾および会田孝一郎、海軍少将の中村

重一からの揮毫が計 6 点掲載されている。続いて、生まれた時から幼少期、中学生時代、大東文化学院時代、中学校教師時代、出征時など生涯にわたる数々の写真が 8 ページにわたって 45 枚ほどを確認することができる。本文は 6 篇から構成されており、第 1 篇「螢雪時代」、第 2 篇「東海戒衣集」、第 3 篇「従軍日記抄」、第 4 篇「訃報弔辞」、第 5 篇「懐旧追憶」、第 6 篇「思慕追悼」となっている。末尾には「森戸馨君年譜」「森戸馨君関係者」が資料的に付されている。

同書は学徒出陣が行われることになるなど戦局の悪化が著しい時期の刊行であり、また厳しい用紙統制がなされていた時期でもあったが、写真資料も多用された、270 ページからなる立派な書籍であり、出版元として森戸の勤務校であった日本大学第二中学校から刊行されたものであった。巻頭掲載写真の一枚には、大東文化学院教授であった土屋竹雨の自宅へ 5 名ほどの学院同級生とともに訪れ、縁側に座って穏やかな微笑みを浮かべた土屋を囲み写真におさまる、やや緊張気味の面持ちの森戸の姿も見られる。また、巻末の「跋」(=跋文、あとがき) によれば、陸軍大将であった南次郎をはじめとした軍関係者からの協力があったほか、同書中の「中扉」巻頭には同書刊行に際して平沼駿一郎が「森戸君」へとして揮毫し送った文字「以友輔仁」が採られていることへの感謝が述べられており、そのことからも大東文化学院が森戸へ与えた影響とともに、相互の深い関係が推察される。

たとえば、恩師である土屋久泰(竹雨)がおくった弔詩(漢詩)や、本科高等科 6 年間を通じて大東文化学院時代で同級生だった猪口篤志がおくった弔辞など、計 19 からの弔辞を確認することができる。それらの弔辞は、戦地で死去した森戸が世田谷の自宅へと戻り、家族葬が行われ多磨靈園へ埋葬される際におくられたものであった。土屋や猪口のほかにも、恩師にあたる鶴澤總明や大東文化学院同窓会本部からの弔辞も見られる。

また、第 6 篇「思慕追悼」は、森戸が生前に係わった人々が寄せた追悼集である。猪口篤志は改めて森戸との思い出を寄稿しているし、同じく高等科 13 期生として同期であった坂本通や後輩であった侯野太郎からの寄稿など、

その数は 50 を超えて寄せられた。これらの追悼文からは、愛弟子や親友であった森戸への深い愛情を感じられることもさることながら、当時の大東文化学院の教員と学生との「距離の近さ」に驚かされる。学生と親しく言葉を交わし、生活を共にし、直に交流していたことがありありと伝わってくるからである。なお、坂本通は大東文化学院本科からではなく、東京高等師範学校から高等科へ「傍系」入学した人で、その後は大東文化大学教授や同第一高等学校校長を長くつとめた一方、本学評議員や理事、東洋研究所研究員なども兼務し、大学を含む学園全体の発展に大いに尽力した。また、森戸と本科から高等科までまったくの同期であった猪口篤志は、大東文化学院時代から新制大学以降にかけて大学教育の中核を担い、名誉教授となった。妻は森戸の妹の靜子であったから、森戸の死後には後に義弟の関係となったわけである。本学在職中の猪口は、文学部中国文学科はもちろん、本学東洋研究所の発展にも寄与した。

森戸は教師としての生活は 1 年余りと短いものであったが、日本大学第二中学校の教え子たちからも大いに慕われ、記憶に残る教師でもあったようで、多くの生徒たちが「思慕追悼」を寄せている。この『留魂録』に寄稿はしていないものの、森戸が戦死した際にまだ中学在学中であった田中稔も、若き教師の森戸に憧れ、大東文化学院進学を夢見るようになったひとりであった。

旧制中学の生徒であった田中に大東文化学院への進学を決意させたもう一人の教師は、森戸の 1 年後輩の小松忠志であった。小松は大東文化学院高等科 14 期生であり、卒業とともに日本大学第二中学校へ赴任した。戦前に中学校教員の職を辞して北京へと留学、戦後は故郷であった長野県へ戻り、長野県立短期大学教授を長くつとめた。本資料の「思い出」では、夏休みに帰省していた小松の故郷である長野へ突撃で訪れた中学生の田中稔の思い出も記されている。

また、森戸の後任として日本大学第二中学校へ赴任してきた橋本藤吉は森戸の同期で高等科 13 期生、同期の坂本通と同じく他校から高等科へ編入し

た人物である。穏やかで勤勉な性格であった橋本の存在も、田中稔が大東文化学院入学への思いを強める役割を果たしたとされる。

大東文化学院本科へ進学後、田中稔の思い出の恩師として名前の挙がった飯島忠夫は、大東文化学院教授として戦時下の学院教育の中枢を担った人物で、1944（昭和19）年に70歳で退職した。飯島は東京帝国大学選科を卒業後、同大学文学博士となった。また、学習院中等科教授も30年以上にわたってつとめている。同じく大東文化学院時代の恩師として名前の挙がった鵜澤總明については、田中が在学中に大東文化学院総長であったが、同時期には明治大学学長もつとめていた。鵜澤は敗戦後に東京裁判弁護団長となったことでもよく知られている。

さて、本稿において紹介する資料『思い出』の著者である田中稔の在学した、1942（昭和17）年4月から1944（昭和19）年9月までの大東文化学院といえば、校舎を九段より池袋へ移転した直後のことであった。したがって、田中は東京の生まれ育ちではあったが、従前に九段校舎を見たことはなかったようで、池袋校舎で学院生活を送ることになった。また、それまでの大東文化学院は漢文に特化した教育を行っていたが、1938（昭和13）年度より新たに三部制へと学科体制全体を見直して大幅な変更を行っていた。つまり、草創期の大東文化学院とは性格をやや異にする、「新しい時代の」大東文化学院の卒業生であった。前述したように、田中は同年に戦時体制下における半年の繰り上げ卒業となっており、最も在学期間の短い時期の同窓生である。九段校舎における大東生と、池袋校舎における大東生とでは、戦時下であるか否かという点が最も大きな違いであった。なお、「伊勢神宮参宮」という入学後すぐの行事は、創立以降、旧制時代を通じて続いた大東文化学院の伝統であった。

田中稔は晩年になって、無窮会『東洋文化』に2本の原稿を寄稿して残している。「漢文教育の使命 —『松本洪先生遺稿』に想う」（平成19年4月20日、復刊第98号）、「語れること・語れぬこと —大東文化学院の思い出

から一」（平成 22 年 4 月 20 日、復刊第 104 号）である。

特に後者のものには、田中の記憶に強く残った大東文化学院時代のエピソードがいくつか語られている。その冒頭で触れられているのは、飯島忠夫が授業の中で「軍国美談を糾弾」したというエピソードであり、これは今回紹介する本文のなかにも同様の内容が含まれているので詳細は割愛する。ただし、『思い出』本文中に含まれていなかった点がいくつかあるので補足しておくと、飯島の軍国美談糾弾を聞いて、田中は「学院の中枢であられた先生を通して、当時校内には、時勢迎合の気風が、微塵もなかったことを強調したかった」と述べ、続けて「世上ややもすると、学院を、軍国主義の牙城視する向きがある」と憤っており、その点の釈明を行うためにも、田中は飯島によるエピソードを改めて世に残しておきたいと考えた。田中にとっても生涯忘ることのない、非常に重要な意味をもつ出来ごとであった。一方、同稿のなかに森戸馨のエピソードも含まれており、やはり今回紹介する本文に記された同エピソードであるため、その詳細説明は割愛する。ただし、細かい点ではあるがいくつかの相違があり、たとえば本稿で紹介する『思い出』本文中では「ウルサイ！」と書かれているのが、無窮会への寄稿には「やかましい！」となっており、「と、いうふうに叱るんですね」とつけ加えたと記されているから、やや具体的である。最後に、本文には記されていない出来事が確認できる部分を抜粋し紹介しておく。

「念願の学院入学を果たした私の目標は、言うまでもなく『高等科進学』の一点にあった。だが、本科と高等科とでは別世界だった。周囲を見まわすと、兵役猶予の特典を狙う者、第一志望校に失敗した者、とりあえずの腰掛け等々が大部分で、我々はむしろ少数派という始末だった。それに比べて、ひたすら勉学に励む高等科の諸兄の、何と貴く映ったことだろう」

また、田中が大東文化学院在籍中に出会った、特に記憶に残った先輩として、安生富士という名をあげている。安生富士は大東文化学院本科 10 期で、卒業後は入営し陸軍中尉となった。後に召集解除となり、約 10 年を経て改

めて高等科 19 期生として高等科へと進学した人物である。『思い出』では安生富士についての回想を比較的長文でしたためているが、実は直接会話を交わしたことはなかったらしく、遠くから見ていただけであった。「いつも唐本を手放さぬ安生さん」「浮き足だっている本科生に比べ、高等科の人々は鬼気せまるほど勉強に打ちこんでいた」「国難に際しては、進んで死地に赴くのをも辞せず、世静まれば、求めて中学生相手の一教師に安んじて、敢えて聞達を拒んだ安生さん」と振り返りつつ、安生富士を筆頭とした高等科生たちの、別世界ともいえる学問への情熱とその姿勢に畏敬の念を示した。なお、安生富士は高等科在学中に再度応召され、陸軍大尉として長崎方面へ赴任、戦後は東京都内において区立中学校教師として生涯を送った。大東文化大学 16 期生（文学部日本文学科卒）で、大東文化大学第一高等学校元校長の安生高明は、安生富士の長子である。

【解題者注】

原稿について、基本的に原文をそのまま掲載しているが、本文中の明らかな誤字等については適宜修正を加えた。また、手書き原稿を活字に起こしたため読みにくくなった場合は、解題者の判断で改行を減らしたり、あるいは句読点を加えたりするなどの調整を一部行った。

田中稔 『「大東文化学院時代の思い出』

1. どうして学院を選んだのか —学院出身の恩師方—

昭和十四年六月、私の在学していた日大二中（日本大学附属第二中学校）に一人の若い先生が赴任してきました。大東文化学院という聞き慣れぬ学校の卒業生で森戸馨先生（23）、高等科13期を終えたばかりの方でした。温厚篤実の君子、玲瓏、玉のことし、といえば先生を思い出すほどで、白皙の貴公子そのものでした。何しろ本科高等科六年特待生で首席を通した秀才と聞いています。

三年生の私は先生から教科書の漢文を習いましたが、イラスト入りの故事のプリントをいただいたことや、柏梁体はくりょうといつて漢詩を作る真似ごとをさせられたことを覚えています。あまりやかましいと、さすがにたまりかねて「ウルサイ！」と一喝された後、恥ずかしそうに「というのですネ」とつけ加えました。運動は苦手らしく、職員対抗の野球では、所在無げに外野に立っておられました。

翌十五年九月応召、十六年八月中国山西省曲沃の野戰病院で戦病死されました。26歳です。朝礼で聞かされ、全校生徒が啜り泣きをしたとき、私はひそかに「お嬢さん」と呼んでいた先生の死に傷ましさの余り胸が絞めるつけられる思いでした。

森戸先生のおかげで学院の評価が一挙に高まり、続いて翌年一級下の小松忠志先生（高等科14期）が迎えられ、私たちの担任となりました。「聖人」とニックネームの森戸先生に対し、ヤンチャ坊主を思わせる小松先生には早く「坊ちゃん」のあだながつけられました。口癖の「ワシャ知ランゾ」が語るように、極めてざっくばらんな親しみぶかい方で、たちまち生徒の人気者となり、校内は森戸派と小松派に分かれるほどでした。

担任でもあり、完璧型の森戸先生より身近な小松先生に魅了された私は、夏休みに故郷の信州須坂に帰郷された先生を慕って、友人と三人で東京から一週間野宿をしながら訪れ、ご一家を驚かせたほどです。帰路はさすがに旅費を拝借しましたが、無断出発でしたので帰宅後散々叱られたものです。

小松先生も首席で掌事を勤められたそうですが、廊下で森戸先生に会われたときなど、実に礼儀正しく丁重で、学院の校風がしみじみと思い知らされました。これも学院を選んだ動機の一つです。ところが、夏休みも明け、秋になると衝撃的な発表がありました。北京の新民学院に留学されるというのです。私の大東文化学院進学希望を心から喜んでくださった先生は、高等科を終えたら必ず北京に呼んでやると約束してくれました。無論、太平洋戦争以前のことです。

代って担任になられたのが橋本藤吉先生（高等科13期）ですが、上記両先生が本科高等科出身であったのに対し、他を経て高等科を卒業された、いわば傍系の方で、苦労したせいか大分毛色が変っていました。小柄で気弱そうな、あまり積極性の感じられない人柄でしたので、学校側からも生徒からも、ウケは今ひとつで評価も芳しいといえませんでした。恐らく親しく接近したのは私一人ぐらいだったでしょう。いつもおどおどしているような眼差しの先生に同情していると、いつしか頼りにされているらしく、私に対し特殊な感情を持っていると、級友から誤解されたこともあります。何も食べていない、本を売ってきてくれと頼まれ、あまりの安さに小遣いを上乗せして渡すと、キミは売るのがうまいと褒められました。

直接お習いしませんでしたが、戦後大変にお世話になった坂本通先生（高等科13期）も現在と同様に立派なヒゲを鼻下に、威風堂々詩を吟じられながら、校内を闊歩しておられました。森戸先生の義弟猪口篤志先生（高等科13期）に入学後お世話になったのも奇縁でした。

七十歳で『東洋文化』誌に発表した抜刷りを小松先生（長野短期大学教授）にお送りすると、すでに十年前に亡くなっており、二中時代を懐かしんでおられたそうです。橋本先生はどうに消息不明の由でした。坂本先生お一人のご健在が何よりの喜びです。

私はここで初めて告白します。大東文化学院は、入学以前、すでに優れた個性的な卒業生の諸先生により、一人の若者を見事に薰染しておいてくれたということです。復員後、故郷東京にも帰れず、自他共に許した高等科進学

も所詮夢に終りました。

2. 第一回東京空襲と学院生活のスタート

忘れもしない昭和十七年（1942）四月十八日、第一回の米軍機による日本空襲があった。空襲と言っても後のB29を使っての本格的なものではなく、ドーリットル中佐率いる中型機によるものだったが、開戦の大勝利に酔い痴れていた国民の度肝を抜くには十分だった。

大東文化学院では入学式が済むと早速伊勢神宮参宮をするのが恒例となっていた。第一回卒業生で神宮皇學館教授近藤奎氏に迎えられて参拝をするのだが、それに先立って、「天孫、国を肇むる云々」の国分青厓作の校歌（漢詩）を五十鈴川畔で斎吟させられたものだった。

一泊して帰郷したのが、その四月十八日だった。荻窪の自宅に荷物を置くと、かえて予定していた神田日活館に「燃える大空」という戦争映画を見に出かけた。わが空軍機の活躍ぶりに大喝采をしていると、突然すさまじい砲声が聞こえてきた。もちろん映画の効果音だと思いこんでいるから、だれ一人騒ぐものはない。迫真の演出に拍手するものさえいた。映画を見終えて、何気なく空を見て驚いた。皇居の上空が一面、阻塞気球に引かれた網で覆われているではないか。これで分かった。先程の砲声はホンモノだったのである。逃げ遅れた小学校の児童に不幸な犠牲者が出了のもその時のことだ。航空母艦や軍艦の艦載機は、燃料の関係で長距離を飛べぬから本土に近づけるはずはないと、こちらはタカをくくっていたのである。ところが米軍は、飛行距離の利く空軍機を空母で運ばせ、空襲後は本土を横断して中国大陸の基地に帰還させるという、まったく予想もしない手に出たのであった。

こうして学院入学と同時に、我々は、生涯忘れ得ぬ洗礼を浴びせられることになったのである。

3. 人情無視の軍国世相に憤慨する飯島忠夫先生

当時、総長が法律家として名高かった法学博士鵜澤総明先生で、次長が飯

島忠夫先生だった。時として先生が式典等で代理をされることがあった。その場合、一番仰天したのが、式辞告辭の簡略なことだった。例えば四大節はこうだ。

「本日の意義については、諸君は十分承知している筈である。よって、本日を意義深く過ごされたい。以上。」

これで全部だ。一分もかかるまい。あれほど簡潔な式辞の類にこれまでお目にかかったことがない。商業がらか、鵜澤先生の話は委曲を尽くして実に長かった。それに比べると痛快なほど短く天地の差だった。いい大人が小学校以来耳にタコができるほど聞かされた話を、改めて口にするまでもないと思われたのであろう。

古代中国の天文学にはバビロニアの影響があると主張、京大の新城新蔵博士と激しく対立した先生は、独学で学位を取られた篤学の方であられた。

学習院教授を兼務しておられ、時々海軍将校を思わせる同校の教官服姿でお見えになることもあった。これは国文法の東条操先生も同じだった。学院と学習院は、どちらも明白で近いせいもあったのだろう。論語を教えていただいたが、実に春風駘蕩、孫を諭す祖父の觀があり、これ以上適任の方は無かった。ただ、「衆星ノコレニ向ウガゴトシ」のくだりで、「これはおかしい」とつぶやかれたのが、印象に残っている。

その先生が、珍しくある日の授業で色を成したことがあった。その日の新聞に大きく採り上げられた記事の件だった。父親危篤の報に接した軍需工場の一一行員が、周囲の勧めをも振り切り、職場を離れなかった、という当時よくある軍国美談の一つである。

「こんな人情に背いた話はない。本気でそう考えていたら人間ではないし、泣き泣きだとしたら口クな仕事のできるわけがない。第一、美談として表彰したら、今後、他のものに同様なことが起きたら、どうなると思うか。」

平素温厚な先生の口から、こんな激烈なことばが出ようとは予想もしなかつただけに、思わず一同肅然としたものであった。当時は、婦人運動の先頭に立った某女史が、愛児を刺し殺し、共に刃に伏して夫を励ました武士の

妻にならえと呼号した時代であった。

かつて紀元節をめぐって、先生は学習院で院長の乃木大将に一步も譲らなかつたと聞く。いかに多くの先人の注があろうと、論語は、何よりも先ず、人情に基づいて味わうべきではないか。私に論語味読の秘訣を教えてくださつたのが、あの日の飯島先生ののことばだった。

4. 学院でタブーを学んだ中国語授業

四年前の平成十五年十二月七日付、当地の神戸新聞「発言」欄に、「三つのタブー」と題した私の投書が掲載された。西安の反日騒ぎのあった後で、たまたま大相撲の北京場所予告を目にし、黙視するにたえられなかつたからである。

中国における三つのタブーとは、①擬似漢詩（平仄押韻を無視、漢詩だけ羅列したもの）を振りまわすな、②裸になるな、③褲を見せるな、という三箇条である。いずれも、戦時中、「侮日」の原因になるから、と厳しく注意されたものばかりである。裸は苦力ぐらゐのもの、不用意に素足を見せる日本女性が襲われた例はいくらもある、というのだ。③「褲を見せるな」にいたっては、理由が理由だけに学院時代教えてくれた中国語（当時、支那語）講師奈良先生の表情が、今も浮かんでくるほどだ。ツルツル頭の大男、海坊主と思わせる彼は一見して、当時大陸を股にかけていた支那浪人の一人と知れた。後日になって、彼が往年張之洞の幕客だったことがわかり、成程と思った。「褲はあるものを連想させるからいけない」こう語って、ニタリと意味ありげに笑い、三音の中国語を加えた。よく分からなかつた、とにかく人前で口に出せぬことだけは想像できた。

昭和四十七年九月二十五日、宿願の北京入りをした角サンこと田中角栄首相は、得意の心境を、「国交途絶幾星霜」で始まり、「北京空晴秋氣深」で結ぶ七言絶句らしきものを随行の記者団に示し、そのあげく、大相撲の北京・上海場所が実現した。

褲は単なる下着ではない。裸祭の語るように精進潔斎の証しだというだろ

う。まわし姿は力士の正装、陛下の前にも出られるではないか、と。相撲が日本の誇る国技であることは疑いない。だが、所変われば品変わる、という。いくら国技でも、少しでも誤解を招くようなことはすべきではないだろう。

この投書に対し、早速 A さんという人物からの反響が同紙に寄せられた。少年時代を中国で送った彼は、しばしば皇軍慰問の大相撲にめぐりあわせたそうだ。

「仕切り直し」に失笑する多くの中国人にまじって、「ふんどし一つでの相撲は、ちょっと野蛮ですね」という、顔見知りのインテリ中国人の一言に、最も痛烈な衝撃を受けたと語っている。そういえば、モンゴル相撲も裸ではない。毛沢東、周恩来以下、中国人上下がどう受けとめたかは知らない。それが現内閣（当時、小泉）によって、再び友好親善の名のもとに、実現されようとしているのだ。これほど中国研究者が揃いながら、どうしてだれも注意しないのか。この投書のせいでもあるまいが、北京場所はほんの申訳程度に報じられただけだった。

「漢学は生きた泥亀が相手、支那語は標本の亀が相手」と中学の担任小松忠志先生は教えてくれた。こぎれいな中国研究の横行を見るにつけ、生きた研究を貫く学院の健闘を心から祈ってやまない。

【Introduction of Research Materials】

Minoru Tanaka's "Memories of Daito Bunka Gakuin"

Nina Asanuma